

後期：現代キリスト教思想研究2——現代あるいはポストモダン

オリエンテーション+研究発表

1. 解釈学的神学と現代思想 10/10
2. 政治神学1——シュミットとモルトマン 10/17
3. 政治神学2——アガンベン 10/24
4. 政治神学3——ジジェク 10/31
5. 解放の神学1——フェミニスト神学1 11/7
6. 解放の神学2——フェミニスト神学2 11/14
7. 研究発表 11/21
8. 研究発表 11/28
9. 研究発表 12/5（予備：1/9）
10. 解放の神学3——黒人神学 12/12
11. 解放の神学4——アジア 12/19 12/26 は休講（東京出張）
12. 宗教の神学とヒック 1/16
13. エコロジーの神学 1/23

<前期：解釈学的神学とブルトマン学派>

・1950年代から1970年代：

ハイデッガー、ガダマー

ブルトマン、エーベリング、リンネマン、ユンゲル

リクール

↓

思惟を規定するもの：言語、テキスト、レトリック、伝統と伝承の歴史性
言葉の出来事

1. 解釈学的神学と現代思想**(1) 解釈学的哲学と神学**

1. ポスト近代を自覚的に生きる哲学

・啓蒙主義（啓蒙主義的な普遍的理性・認識論的）以降

・形而上学的思惟以降

ニーチェとハイデッガーのラインで

・制約された自由、媒介された思惟 → 全包括的で絶対的に確実な直接知の断念
弱い思考

・表現を介した自己への接近

歴史性あるいは伝統

2. ポストモダンではあるが、モダンの帰結でもある。

シュライアマハーの転換の帰結：教義学から信仰論へ

言語性と解釈史

↓

ポストモダンの思想状況で、神学的知はいかなるものであり得るか。

(2) ヴァッティモの場合

3. 「弱い思考」

多源性、歴史性という前提における思考

4. 絶対的で唯一の思考の枠組みとしての形而上学（＝強い思考）は成り立たない。
5. しかし、相対主義という無思考性でもない。

＜存在＞の歴史への信頼

キリスト教的、神の創造と摂理

6. ヴァッティモ「弁証法、差異、弱い思考」

「「強い」思考、推理を演繹的に進めていかざるをえない思考」(10)

「わたしたちが出発点とすることのできる経験」「概して日常的な経験」(10)、「歴史的な性質を付与され濃密な文化の累積を支えとする経験」、「＜現存在＞は被投的な存在」(11)

「部分的でない観点、ひいては全体を全体としてつかみとることのできる観点」(12)

「進歩への信仰」(14)、「単一の直線としての歴史は、勝者の歴史にすぎない」(15)、「弁証法や統一性そのものを犠牲にしても、批判的要請を妥当させようとしたこと」(16)

「形而上学を形づくっている強い構造」(18)

「出来事性」(21)「存在（という概念）が弱体化し、その時間的本質が明白になったということ」(22)、「差異の思考が弱い思考へと屈曲する」(23)

「存在の安定した構造の終焉」「神は存在するとか存在しないとか言明するあらゆる可能性の終焉」、「屈曲は、伝達と運命＝送付というように解された存在の真理を思考するさいの仕方」(24)

「追憶のなかでのみ接近する」(25)、「その遺産へと、あつて生きてきたものの痕跡に起因するピエタース」(26)

「価値の転倒はわたしたちの歴史の次の諸世紀を満たす運命にあるのだった」(26)

「真理の地平、もろもろの命題の検証と反証が可能になる領域を開くのは、伝達であり、運命＝送付である」、「わたしたちが遺産として受けとってきたものにたいするピエタースの力」、「尊敬の感情」(30)

「ピエタースも歴史的に異なっている」、「解釈学のさずさわる、この仕事」、「心理の概念についての弱い存在論」(31)、「真理の「修辭学的な」とらえ方」(32)

「思考に付与してきた主権性の立場をもはや要求できなくなる」(32)、「思考そのものの投企力の減少を理論化すること」(33)、「存在を伝達および記念碑として思考する弱い存在論」、「伝承させる世襲財産は、単一の総体ではない」(33)

「勝者たちの歴史が積み重ねてきた廃墟」「これらの廃墟へのピエタース」(34)

「新しいものを他の文化としての他のものと同一視すること」、「超形而上学的な人間性を準備すること」(34)

7. 『哲学者の使命と責任』

(1) 哲学と科学

「ガダマー」「科学にたいして倫理的な限界を提示しているのである」、「科学の社会的・歴史的な効果の問題」、「この倫理性は精神の連続性、すなわちわたしたちはあるひとつの共通の状況に属しているという事実と関係がある」(12)

「形而上学にかんするハイデガーの議論の意味するところをガダマーはほんとうには受け入れようとしていないこと」、「ガダマーがハイデガーの形而上学批判を受け入れるのは、なによりも科学主義ないし科学客観主義にかんしてである。ハイデガーのいう真の意味での＜存在＞の歴史といったものはガダマーの念頭にない。」(13)

「わたしはハイデガーと同じく、科学を現代における＜存在＞の運命の本質的な一側面であるとみているからである」(14)

「世界像は本質的に複数の像に転化する」(15)

「これらはすべて＜存在＞の命運にかかわる出来事である」(16)

「ガダマー」「相対主義とヘーゲル主義の中間に立ち止まってしまっている」(20)

「弱い思考こそヘーゲル主義に取って代わることのできる唯一のオルターナティブなのではないだろうか。もし理性の最終的自己確証に向けての過程がないとしたら、あとには弱い存在論という着想しか残らないのだから」(21)

「もしなんらかの純粋な相対主義に陥ってはならないとするなら、しかしまた他方、ヘーゲルから究極的絶対性の理念、すなわち完全な自己意識という理念を奪い去ってしまったなら、なにを代わりに置けばよいだろうか。運動の原理に転化した[「存在」と「存在者」の]存在論的差異の原理に訴える以外にないのではないか」(22)

「存在者の直接性を乗り越えてなにか別のものに向かうひとつの仕方」「おそらくはもともと「完璧な」かたちで、科学はまさしく<存在者でない存在>を代表している」(24)

「「絶対主義的な」存在論、すなわちヘーゲル的な存在論」(25)

「「どんなもの」は複数存在すると主張する者、すなわち、「なんでも可」というテーゼを主張する者には、他のテーゼを主張する者たちよりも多くの道理があるということなのだ」(27)

「弱体化してきた存在の歴史」(28)

「あるテーゼが普遍的な価値をもつということ自体、複数の文化が存在してはじめて思考しうるようになるからだ」、「相異なるパラダイムないし互いのあいだで深く異なる見方が出会うようになってはじめて、普遍性にまつわる問題が生じるのだ」(32)、「さまざまな宗教的信条が衝突しあい、自分とは別の信条に出会って、それらとある種の共通基盤を見つける必要があるときに、合理神学が重要性を帯びて登場してくるという事実である」(32-33)、「この人類一般に普遍的な基盤はじつはそれほど普遍的ではないのではないか」、「その基盤自体が歴史的な変成をとげており、しれをわたしたちはたえず構築しなおしているからである」(33)

(2) 哲学、歴史、文学

「レトリックとしての真理」「真理は」「説得の問題である」、「哲学が使用する論法は複数の人間を相手にした論法であって」、「説得によって明らかにされる真理なのである」、「人びとが広く分かちあって前提から出発して解釈しようという提案」(41)

「哲学において問題となる真理は複数の人間を相手にした説得の成果であるが、ハイデガーのいう<存在>の歴史への一定の信頼にもとづいている」(42-43)

「<存在>の歴史への信頼」、「それらがそのような古典に転化してしまったという事実はわたしをも渦中に巻き込んでいる。わたしという存在は大部分、古典が執拗に存続しているおかげで生まれたものなのだ」、「ガダマーが先入見の果たす積極的な意味での根源性を主張し、客観的精神の意義を強調しているのは、一理あることだった。わたしが結局ふたたびキリスト教信者になったのも、同じ理由による」、「歴史にはなにか神のようなものが存在する」(43)

「自分たちは神によって造られた存在であるという意識とでも呼んでよいもの」、「わたしたちは自分の力でこの世に存在しているわけではなく、他の者たちのおかげでこの世に生を享けている。そして、この事実こそわたしに遺贈された財産なのだ。この世で唯一わたしが手にしている大切な財産なのである」(44)

「教化としての建設には知の累積していくという意味も込められている」、「哲学が関係するみずからの過去は最終的に確定された土台としての過去ではなく、つねに新たな解釈へ開かれている可能性の総体としての過去」(45)

「研究の伝統」「この意味では哲学と文学的解釈学と科学には連続性がある」、「じっさには事件の場合にも、そこで使用される言語や実験方法は歴史的に規定されているという間

題が生じる」(46)

「科学の「歴史を超越した」姿勢は存在論の立場と区別がつかなくなってしまう」、「歴史に注目しすぎると、存在論から遠く離れたところへ運ばれていきかねない。これは解釈学にたいして構造主義者が突きつけてきたおなじみの異議である」(47)

「エアアイクニス[性起]としての<存在>というハイデガーの概念」「<存在>がほんとうにエアアイクニスであるなら、そのときには<存在>そのものが歴史であり時間であり出来事のものであることになるのだ」、「歴史が存在者に特有のものであるというのは真実である。が、逆説的なことにも、存在者に注目しすぎると、存在者そのものを非時間的なもの見なすようになる」(48)

「神の死についてのニーチェの告知」、「神の死というのはむしろ、わたしたちが巻き込まれているもろもろの出来事の経過を見やって、大胆にも「神はもはや必要でない」と認めてみよう」と解釈したものなのだ。「神は死んだ」という告知は、科学と技術のおかげで原始人が感じていたような恐怖なしに生きられる世界では神はもはやなくてもかまわない、と人びとが広く認めていることの証にほかならない」(49)

「ニーチェの解釈で神がもはや無用の嘘であることが露わなるのは、ほかでもない神への信仰によってわたしたちの個人的・社会的な生活になかに導き入れられてきたもろもろの変容によるものなのであった。つねに安定と安心の原理として機能してきた神は、つねに嘘を禁じてきた神でもある。だから、信者たちが「神が存在するというのは嘘である」と言明するのも、神の命令にしたがってのことなのだ」(50)

「真理の経験を本質的に解釈的なものであると認めるのはそれ自体がひとつの解釈であることが認められる。また、真理が歴史的なもの(地平的なもの)であるという理論はそれ自体がひとつの歴史的な真理として受けいられるのである」(51)

「わたしがわたしという存在について意識しているときにはわたしはすでに変わってしまっている」、「「わたし」は、わたしという存在であるのに加えて、わたしという存在についての意識でもある」、「この点こそ現象学や弁証法などカント以降の哲学すべての根底をなす要素にほかならない」、「これはまた解釈学的前提でもある」、「進行する事物とそれを不完全なかたちで記述するフレーズからなる総体」(52)

「完全なニヒリズム、「いっさいが解釈である、そしてこういうふうに言っているのも解釈である」という立場の方のほうがまだましである」(54)

「自己意識はけっして事物の状況に適合した記述になることはない。それ自体がつねにゲームに巻き込まれてしまっているからである。解釈学的な解釈概念だけがなんとかこれを考慮に入れている」(54)

「追跡しているのは記述の客観性という概念についての解釈であって、記述の客観性そのものを拒否しようとする態度ではないということができる」(55)

「科学的研究によって可能なものになった技術の使用にかんする問題は、ハイデガーがいつも言っているように、「技術の問題ではない」ということである」、「それが人間生活一般におよぼす効力と「波及力」のことであるとするなら、技術自身の問題ではないのだ」(56)

「わたしはハードな科学、実験科学の領域において起きることも存在の歴史なのだとみる観点のうちに自分を位置づける。そして存在の歴史にとって肝要なのは言語的メッセージ、文化的メッセージの伝達である」、「科学のほう客観性の基準の変化のリズムが緩慢であるということができるにすぎない。科学の場合には、基準は長期にわたって緩やかに変化していく」

「哲学はわたしたちが日常的に展開している言語活動の自己意識である。より正確に言えば、メタ言語活動の自己意識なのだ。そして、そうしたメタ言語活動の内部に個々の言語

活動はすべて位置していて、そこにおいてそれぞれの安定性を得ているのであり、時と場合によっては変化をこうむっているのである」（57）

「自然科学とも精神科学とも異なったまったく別のなにものかでありながら、しかもその両者のうちに含まれている。「ハードな」科学といえども解釈的な学だからである。解釈的な知であって、たんなる記述的な知ではないのだ」、「客観性自体も＜存在＞の歴史のうちに位置しており、＜存在＞の歴史に所属しているにすぎない」（58）

「事物の布置関係の内部にあって構築された客観性」、「自然的な」客観性は「文化的な」客観性でもあるのだ」（59）

形而上学という枠から、存在の歴史、メタ言語の自己意識への緩める

（3）哲学における論理

（4）真理を語る

「神が死ぬように真理も死ぬ、とわたしにははっきり言える。そして、キリスト教で神の死（そして誕生）は神のひとつの側面であり、神の本性の一部をなしているのとまったく同じように、矛盾した真理の死も真理の本性の一部をなしているのである」（94）

「＜存在＞の歴史はもろもろの出来事できあがっている」、「それらは」「偶発的な事故」ではない。それらは＜存在＞の性起なのだ。真理は、その歴史とともに、こうした＜存在＞の性起のひとつなのであって、振り払おうとしても無理なのである」（95）

（5）哲学への召喚と哲学の責任

<参考文献>

1. ジャンニ・ヴァッティモ『哲学者の使命と責任』法政大学出版会。
2. ジャンニ・ヴァッティモ、ピエロ・アルド・ロヴァッティ編『弱い思考』法政大学出版会。
3. Richard Rorty, Gianni Vattio, *The Future of Religion*, Columbia University Press, 2005.
John D. Caputo, Gianni Vattimo, *After the Death of God*, Columbia University Press, 2007.
Gianni Vattimo, Santiago Zabala, *Hermeneutic Communism. From Heidegger to Marx*, Columbia University Press, 2011.
4. Thomas G. Guarino, *Vattimo and Theology*, T & T Clark, 2009.
5. 佐藤啓介「ジェンニ・ヴァッティモの宗教論——神の死以降の愛論の可能性」
（宗教哲学学会『宗教哲学研究』No. 29 2012、昭和堂、57-69頁）
6. 茂牧人『ハイデガーと神学』知泉書館。
7. ディディエ・フランツ『ハイデッガーとキリスト教 黙せる対決』萌書房。